ブックガイド　気楽に読んで査定力アップ！（144）

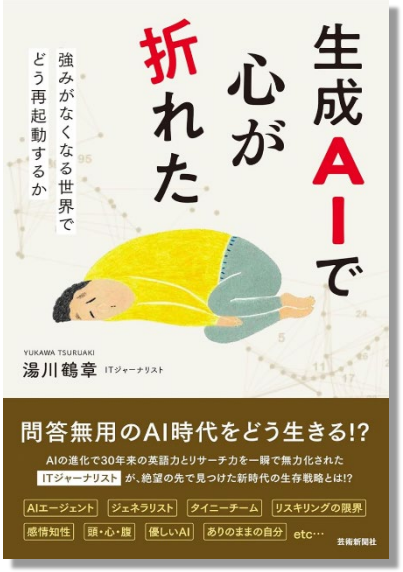
―やがて悲しき――

生成AIで心が折れた

強みがなくなる世界でどう再起動するか

湯川鶴章著

芸術新聞社 税込定価1980円　2025年12月刊行



「気楽に読めて、査定力もアップする本を！」というコンセプトのブックガイド。2026年の幕開けを飾る第144回は、ちょっと刺激的な一冊から。世の中、猫も杓子も「生成AIですごいことができる！」「乗り遅れるな！」の大合唱です。そんなAI礼賛の時代に、書店で思わずぎょっとするタイトルの本を見つけました。その名もズバリ、『生成AIで心が折れた』。

著者の湯川鶴章氏はシリコンバレーの黎明期から現地のハイテク産業を見つめ続けてきた、知る人ぞ知るベテランITジャーナリストです。そんな玄人の彼が、なぜ「心が折れた」のか？ このタイトルに惹かれて手に取ると、そこには意外なほど率直な「敗北の記録」がありました。

本書の前半では、著者が長年積み上げてきた「英語力」や「リサーチ力」といったスキルが、AIの進化によって一瞬で無価値化（コモディティ化）されていく様が、痛切な懺悔とともに語られます。一生懸命AIの最新情報を学んでも、その学習コストを回収する前に、AI自体の進化がその知識を陳腐化させてしまう。まさに「いたちごっこ」の徒労感。私たちのアンダーライティングもまた、専門知識を武器とする知識労働者である以上、この感覚は他人事ではありません。

本書を読みながら、ふと私の脳裏をよぎったのは、かつてのイギリス産業革命の歴史です。当時の綿織物産業でも、新しい紡績技術が導入されるたびに、先行者は莫大な利益を得ました。しかし、その技術が拡散し一般的になると、利益は急速に消失し、工場主たちはまた次の技術革新へと駆り立てられました。

現在のAI革命も、これと全く同じ構造にあります。「AIですごいことができる！」と飛びついても、その技術が民主化された瞬間、先行者利益は霧散する。今、時代の寵児としてもてはやされているAI技術者やデータサイエンティストでさえ、その技能がコモディティ化し、没落するまでの時間はそう長くはないのかもしれません。

著者が吐露する「心が折れた」という感覚は、この逃げ場のない無限競争への疲弊感に他ならないのです。では、どうすればいいのか？

著者は本書の後半で、その答えを「内なるOSのアップデート」、すなわちマインドフルネスやヨガといった精神性、あるいは「心」のあり方に求めます。実はここが、本書の評価が分かれるポイントかもしれません。「結局、精神論か」と。

確かに、私たちのような実務家からすれば、ヨガをしたところで明日の査定業務が減るわけでも、AIの脅威が消えるわけでもありません。しかし、著者が精神世界に救いを求めたこと自体が、今のAI革命がいかに「論理的な解決策が見当たらない」フェーズにあるかを逆説的に証明しているようにも思えます。

産業革命の荒波が落ち着き、新たな社会構造（ポストAI時代）が定着するまで、世界はまだしばらく混乱の中にあり続けるでしょう。その「答え」が出るまでの間、私たち現場の人間はどう振る舞うべきか。

私は、著者のように「心が折れる」ことを認めつつも、やはりこの「いたちごっこ」を続けるしかないのだと感じています。たとえすぐに陳腐化すると分かっていても、目の前のAIツールを使いこなし、わずかな期間の「先行者利益」を拾い集め続ける。今は泥臭く、そのサイクルを回し続けることこそが、唯一の生存戦略なのかもしれません。

「生成AIで心が折れた」。そのタイトルに嘘はありませんが、折れた心のまま、それでもキーボードを叩き続けるしかない。そんな諦念と覚悟が入り混じる、2026年の始まりにふさわしい一冊です。（査定職人ホンタナ　Dr. Fontana　2026年1月）

リンク　👉 著者の「心が折れた」告白動画はこちら